

祈りと行動 支援息長く

東日本大震災は宗教界に大きな変化をもたらした。被災地での幅広い活動は各地の社会的弱者の支援につながり、防災・減災などの観点から行政や地域との連携も進む。震災から10年、宗教者の支援の在り方とは。

顔見える関係

4月1日、震災直後に設立された「宗教者災害支援連絡会」（宗援連、島蘭進代表）の10周年シンポジウムがオンラインで開かれた。宗教者や研究者の有志による宗援連は、教団や立場を超え、オープンな情報交換会を積み重ねてきた。島蘭さんは「情報交換が、それぞれの活動を横につないだ」。そんなふうに10年の活動を振り返った。

発表者がシンポで共通して訴えたのが「顔の見える」支援の大切さだ。

「寄り添い型のサポートに宗教者の役割があった」と語ったのは篠原祥哲さん。紛争の解決や人権、環境問題に取り組む世界宗教者平和会議（WCRP）日本委員会事務局長で、2011年に開設された仙台事務所で16年まで支援のために走り回った。その経験から「つながりが災害後の回復力を生む。顔の見える支援が重要」と強調した。

篠原さんらはシンポに先立つ3月13日、仙台市の荒浜地区で「東日本大震災の追悼と鎮魂ならびに復興合同祈願式」を開いた。

悪天候の中、イスラム教から神道、仏教、キリスト教、新宗教の代表が、震災モニュメント「荒浜記憶の鐘」の前で祈りをささげる。あいさつに立ったWCRP日本委員会「災害対応タスクフォース」責任者の黒住宗道さんは、猛烈な

風に抗するように声の調子を上げた。「いつまで祈るか。いつまでも祈るんです」

社会貢献活動

1962年生まれの黒住さんは黒住教（岡山市）の7代教主。2017年に就任した。黒住教は江戸時代、神職の黒住宗忠（1780～1850年）が立教した。明治期以降、国教的色彩を帯びた神社神道が祭祀を中心に国家神道としての道を歩む中、民間の神道教団として認められたのが黒住教

や金光教、扶桑教などで、こころした教団は教派神道と総称される。

黒住教は社会貢献活動に熱心な教団として知られ、「人道援助宗教NGOネットワーク」（RNN）の事務局も教団本部にある。RNNは、国際医療援助団体「AMD A」（岡山市）と協働するなど、宗教を超え、祈りと行動で国内外の被災地支援に携わってきた。黒住さん自身、1995年の阪神大震災では50日間 にわたる炊き出しを行つた



漁港から海に向かって頭を下げる黒住教教主の黒住宗道さん（右端）ら＝岩手県大槌町



東日本大震災犠牲者の追悼と復興祈願式。「荒浜記憶の鐘」の前で、神道や仏教、キリスト教、イスラム教の代表者らが祈りをささげた＝仙台市の荒浜地区

「縁を結び直した」

ど、社会的な困難に直面する人々を助ける活動を長く続けている。

東日本大震災では、岡山経済同友会が派遣した大学生ボランティアを引率、バスで一緒に岩手県大槌町に入り、5年連続で学生と共に汗を流した。今回、コロナ禍で1年ぶりに岡山を出た黒住さんは、荒浜地区での追悼の後、何度も通った大槌町に久しぶりに入った。

学生と雑魚寝

朝の漁港。海に向かって低頭した黒住さんは、犠牲者に黙とうし祈りをささげた。その後、慰霊祭のため大槌稲荷神社へ。神社は震災の翌年、学生と一緒に雑魚寝をした思い出深い場所という。

地元の人々を前にした黒住さんは「ここに2泊し、片付けなどのボランティア活動に当たった。着物で来るのは初めて」と話した。祈りと、信仰をベースにした行動の双方を重視するのは「宗教者の信頼を伝える一人でありたい」と願うからだ。

歓迎の言葉を述べたのは、黒住さんと協働してきた大槌町の鍼灸師、佐々木賀奈子さん。経営する鍼灸院が津波で流され、自ら被災しながらも地元でケアを続け、熊本地震の際は車で現地に駆け付けた。「世界中の人に支えられてきた。困っている人がいたら助けられるようにしたい」。黒住さんは「何かあったらどうしているかと気遣う。そんな、お互いさまの関係が長続きする」。多くの人と再会を果たした今回の訪問。「縁を結び直した。『忘れない』は結果であり、つながりがあれば、忘れるはずありません」（共同通信編集委員 西出勇志）

黒住教教主も被災地訪問